

周年放牧条件下で生産された三島および十島村産と
入来牧場黒毛和種雌牛の繋ぎおよび群肥育別での産
肉能力と経済性

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-11-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 紙屋, 茂 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10232/9890

周年放牧条件下で生産された三島および十島村産と入来牧場黒毛和種雌牛の繋ぎおよび群肥育別での産肉能力と経済性

紙 屋 茂

目 的

鹿児島県の三島および十島村では、主に竹林を利用した黒毛和種のマキ牛による周年放牧がなされ、子牛の生産が村の主要産業となっている。生産された子牛は船で輸送され、鹿児島中央家畜子牛市場に出荷される。三島および十島等の小離島の子牛は、本土産の子牛に比較して一般に発育劣り、無登録牛が多く、市場での評価が低い。子牛相場が低下するとその傾向は更に顕著になる。しかし、こういった小離島産子牛の産肉能力や経済性について検討された報告は少なく、市場評価での基礎資料は皆無といえる。

そこで本研究では、三島および十島産黒毛和種雌子牛の産肉能力と肥育における経済性について検討し、鹿児島県南西に散在する小離島における周年放牧を飼育した収益性の高い低コスト子牛生産技術を確立するための、基礎資料を得ようとした。

材料と方法

肥育試験には三島および十島産雌子牛で評価額の低い9頭（平均17万9千円）および入来牧場産雌子牛6頭（薩摩市場雌子牛平均価格28万6千円）を用いた。これらの子牛を体重および生後日齢がほぼ均等になるようT区（後期での繋ぎ肥育8頭）とG区（前期後期とも群肥育7頭）の2区に別け、両区とも肥育中期までは群飼育とした。

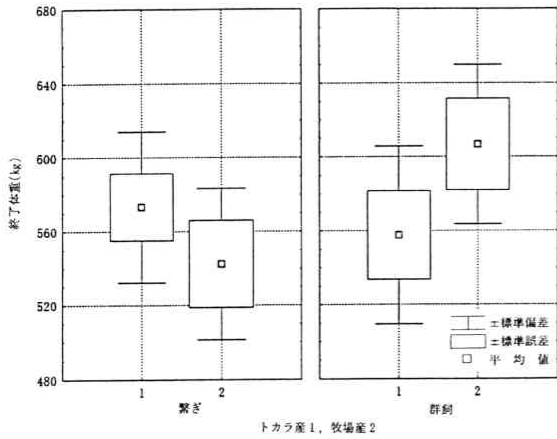
肥育後期からは、T区（8頭）は繋ぎ飼いとし、他のG区（7頭）はそのまま肥育終了時まで群飼育とした。

肥育に用いた濃厚飼料は鹿児島県経済連の前後期飼料とし、経済連の肥育マニュアルを基本に肥育を行った。

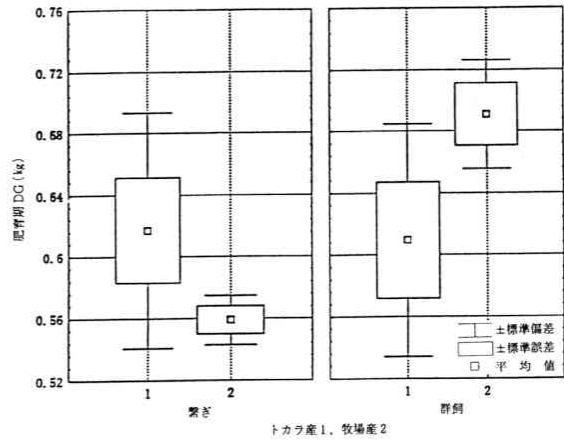
結果と考察

肥育終了時体重はT区で離島産が大きかったのに対して、G区では牧場産が大きくなったが、いずれも有意差は認められなかった（第1図）。肥育期間中の日増体重（DG）はT区では離島産が、G区では入来牧場産が高く、牧場産のT区とG区間で5%水準の有意な差は認められた（第2図）。枝肉重量は終了時体重の結果を反映して、特にG区での入来牧場産が大きい値を示した（第3図）。バラの厚さは特に群飼育で厚くなる傾向を示した。BMS-NOはT区が高い値を示し、後期での繋ぎ効果が推察された（第4図）。しかし、枝肉単価および売上価格では両区間では有意な差は認められなかった。離島産素畜ではカン幅（ $-0.70*$ ）、座骨幅（ $0.68*$ ）および尻長（ $-0.83*$ ）が短いほど枝肉単価や売上額が高くなる傾向を示した。肥育差益は肥育開始時体重が220 kg程度、肥育期DG 700 g程度で最も高くなる傾向を示した（第5図）。また、肥育差益の拡大は、肥育開始時体重が小さく素畜価格が安い場合および肥育開始体重が大きく素畜価格が高い場合の両面、その可能性が認められた（第6図）。

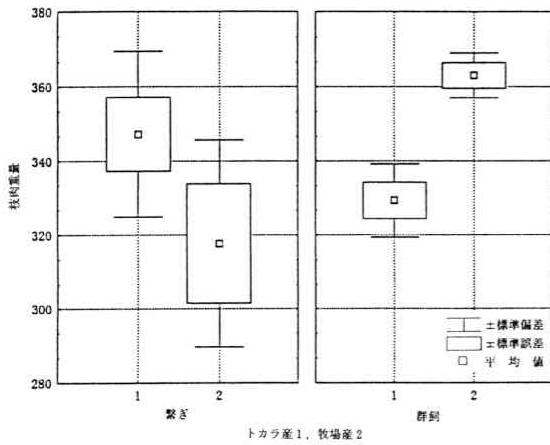
これらの結果は、素畜生産者と肥育生産者双方が利益を確保する技術のありかたを示唆した。



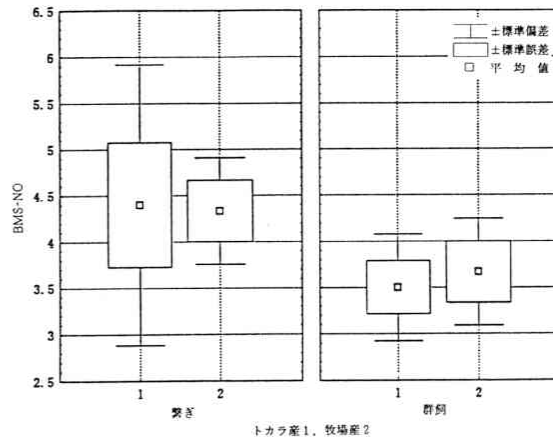
第1図 トカラ産と牧場産黒毛和種雌の繋ぎおよび群飼育別肥育終了時体重の違い。



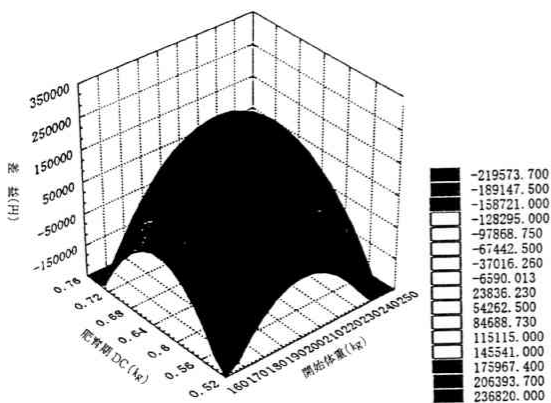
第2図 トカラ産と牧場産黒毛和種雌の繋ぎおよび群飼育別肥育期DGの違い。



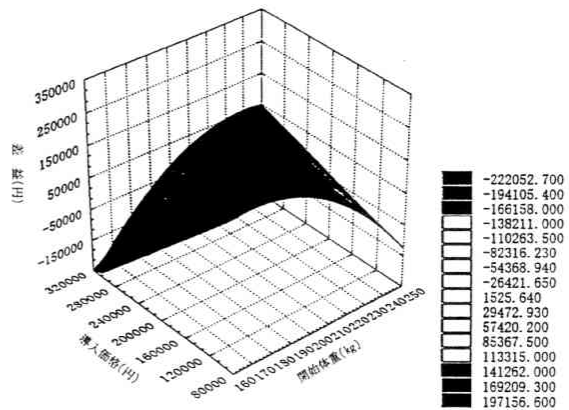
第3図 トカラ産と牧場産黒毛和種雌の繋ぎおよび群飼育別枝肉重量の違い。



第4図 トカラ産と牧場産黒毛和種雌の繋ぎおよび群飼育別BMS-NOの違い。



第5図 肥育開始体重および肥育期DGと差益額との関係。



第6図 肥育開始体重および導入価格と差益額との関係。